



本堂正面に掲げてある初代住職 岡本泰雄師の手造り木製額(写真上部)。
 平成 25 年より来寺記念品に記載している言葉です。
 ひかりにつつまれている事を感じなかった頃の私。
 いつもひかりにつつまれている安心の中の私。
 時には、全身をひかりに照らされている事に緊張する私です。

しんらん同人

No.533

7・8
月号

浄土真宗本願寺派 誓願寺

〒171-0052 東京都豊島区南長崎1-3-8

【電話】03-3950-7828 【ホームページ】<http://www.seiganji-tokyo.jp/>

釈 尚文 独り言

誓願寺住職 古賀尚之

この度、様々のご縁により誓願寺住職を継職し「しんらん同人」の発行も一任され戸惑っておりますが、前進するしかありません。

ご存知のように誓願寺は、戦後まもなく故岡本泰雄師が、都市開教を目指して九州から上京し、現在の地に聞法道場の拠点として建立されたものであり、聞法をご縁とした多くの方々のお陰で今日まで維持されてまいりました。

これからも聞法道場としての立場を中心にしながら、皆様方のお寺として進んでまいりたいと考えております。

しかしながら、私自身の仏法のお味わいをお伝えするには限界を感じざるを得ません。当面「しんらん同人」の内容も誓願寺前々住職 岡本泰雄師。前住職 岡本泰仁師のご法話を中心に展開されることと思いますが、ご容赦いただきたいと思えます。

今号から、昭和48年に「久野俊子様の13回忌法要」における前々住職 岡本泰雄師の法話を数回に分けてお届け致すことにいたしました。

誓願寺に来て、「他力」について悩んでいた私にとって大きな指針を与えてくれたものでした。

皆様が何かをお感じ下されば幸いです。

久野俊子夫人の最後

「13回忌に婦人を偲んで」

誓願寺住職 岡本泰雄



故久野俊子夫人は、唯一人の愛児寛子嬢を昭和16年・千代田高等女学校在学中に失い、続いて昭和29年・夫君順次氏の急逝に遇われました。

また孤独のうちに闘病20余年、昭和36年・61歳にて浄土往生を遂げられました。その間、千代田高等女学校のお世話や福祉事業に精力的に取り組まれた方です。

(礼讃文)

われ今幸いに まことのみ法を聞いて 限りなき命を賜り

如來の大悲に抱かれて 安らかに日を送る。

つつしんで深き恵みを喜び 尊きみおしえをいただきまつらん。

本日は全く不思議なご縁で、久野さんの13回忌のご法要、ご縁に逢わせて頂きました。こうして私までお招き頂きましたことを本当に有難く思っている次第でございます。

実は先日、幸田先生が雑誌の「なでしこ」をお送り下さいまして、先般久し振りに拝見いたしました。確かあれは1号でございましたが、1周忌の時に作られたもののようにございました。

それを拝見いたしますと、久野さんが亡くなられる間近かの頃

でございますが、幸田先生のご紹介と申しますか、お導きによりまして、久野さんのお宅をお訪ね致しました。その時のことが書かれてありました。

内容は、私がお通夜の晩にお話をさせていただいたことが掲載されておりましたもので、私がお話申し上げたことながら本当に有難く読ませていただいたことでございます。

自分で言ったことが有難いというのはおかしく思われるかもしれませんが、そこに流れているものは私の意志ではなくて、久野さんご自身が喜ばれたお姿があるからであります。

如來のお慈悲を讃嘆してゆかれたお心持が述べられてあるからでございます。

そういうご縁から、このたびの13回忌にもご縁を結ばしていただくことが出来たので、本当に余程深いご縁があるなど、つくづく思っているような次第でございます。

実はそこに書かれてありますものは、その頃、事後承諾と申しますか、私がお通夜の晩にお話させていただいたことが、あの雑誌の「大法輪」に出ております。

私はいつの間にこんなものを書いたのだろうか、書いた覚えはないんだがと、段々尋ねてみますと、恐らくこれは、幸田先生が録音なされたものじゃないかと思うんですが。それが文章になって「大法輪」に掲載されておりました。

それと同じものがこの「なでしこ」に書かれてありました。大変有難く読まさせていただいた訳でございます。

私としましては、久野さんを偲ぶということに關しましては、そこに書かれてあることしか存じません。それで、これは全くの繰り返しになると思うのですけれども、ひとつ皆さん方も、もう一度その点をお味わい頂いて、久野さんの晩年のお姿というものを偲んでいただくと同時に、皆さん方も、仏法を喜ぶ縁にしていただければ有難いことであり、また久野さんも大変お喜びになることではないかと思う次第でございます。

実は千代田女学園には、最近は何遍かお邪魔をさせていただきまして、お話をさせていただく機会を恵まれてまいりました。

ただし、近頃はそうでありませけれども、その当時、幸田先生にお目にかかる前は千代田女学園にはあまりご縁がございませんでした。もちろんその学校があることは知っておりました。けれども、再三深いご縁が結ばれるようになりましたのは、その後のことであつたかと思うのであります。

で、幸田先生から突然お電話がございました。その時に、実は久野さんという方がいらつしやつて、いま大変仏法の問題について悩んでおられる。だから、ひとつ来て話をしてもらえんどうか、ということでごございました。

私は東京に出てまだ間もないことでもございましたので、いろんな事情もまだ判りませんし、東京には立派な先生も沢山おいでになることだから、私のごときものに声をかけていただくこともないじゃないかと思ひまして、実は、築地本願寺などにもご連絡いただいたらどうかと申し上げたんです。

そうしましたら、これはご縁というより仕方ないんですが、とにかくあなたに来てくださいと、強引なお話でございます。それでお電話が終わりましてから、幸田先生が早速私の汚い寺においでくださいました。

それでお話を承りますと、信仰上の問題で非常に悩んでいらつしゃるので、ひとつ話をして欲しいんだと、そして、いくばくもない命であり、いつどうなるか判らない状態であると。こういうお話でございました。

私もそれをうかがつて、それは大変だ。とに角お伺いすることに致しました。

夕方でもございましたが、その当時私は中古のスクーターで走り回っていた頃でございましたが、そのスクーターの後ろに幸田先生に乗っていたくださまして、西荻窪の久野さんのお宅をお訪ねしたのであります。



参りますと、玄関のところ「面会謝絶・主治医」と書いてありました。相当ひどいんだなあと、それを見て思ったんですが、幸田先生のご案内ですから、お家に入らせていただきました。

確か6畳か8畳位の部屋だったと記憶するのですが、一方が庭に面しており、入って左側の所にベッドが置いてありまして、そこに久野さんがお休みでした。右側の方には床の間がありまして、いろんな道具もあつたようでしたが、その高いところにお仏壇が安置されてある。丁度お休みになっていらっしやる久野さんの所から臥たままで見えるところにお仏壇が安置されていました。

私は、これは習慣でありますけれども、他所さまにお伺いいたしますと、一番先に仏さまにお礼をさせていただくの習慣といたしておりますので、部屋に入るなりお仏壇の前に座りまして、偈文を静かにあげさせていただきました。

手を合わせお勤めをしつつお仏壇の中を見ますと、そのお仏壇の中には、亡くなられた寛子さん・お嬢さんの写真、それからご主人の写真でありましょう、それがお仏壇の中一杯にかざられていました。阿弥陀さまのお姿はほとんど見えないのです。

ですから、久野さんのお休みになっていらっしやる所からも、恐らく仏さまのお姿は見えないで、お写真だけが見えているという状態じゃないかと思いました。



それで私はそれを見ながら思ったのです。ははあ、問題はあるんだなと思いました。悩みがあるとおっしゃっていらしたのが、その悩みはどういう悩みであるか、まだその時はうかがっておりませんでしたけれども、私はその飾りを見まして、問題はここだなと、ふっと思ったんです。

それでお参りを済ますと、幸田先生からあらためてご紹介いただきましたまして、久野さんにお目にかかりました。

その時は、皆さんもお親しい方々ですからご存知の通りでありますけれども、頭の毛はもう真っ白であります。もう体といえぱ全く骨に肉付けたようなものであります。何処を探したって肉のないような、もう実によせ衰えてしまったお体でありました。

そして手にお数珠が、腕輪念珠が確か三つか四つ掛けられておられました。

私が参りました時、横になっておられましたか、お話を承りますと、もう横になつたら横になつたきり真直ぐになれない、どっちも向けない、させられたまましかどうにもならない状態にあつたようです。

そこで私は、はっきりとは今記憶しておりませんが、その時に、何か本当に大変だと思うが、何かお尋ねになりたいことがあるましたらと申しましたら、その時に久野さんがおっしゃるのに、本当に蚊の泣くような声でしたが、やっと出る声でお話を

聞かされたのです。

それは一口で言ってしまうと、自分はお浄土に参りたい。お嬢さんの寛子さんの往ったお浄土に自分は参りたいんだ。どうしたらお浄土に往かれるだろうか、ということでありました。

これは、皆様もご承知のように、たった一人のお嬢さんを18歳という美しく元気な時に亡くしてしまわれた。

その亡くなったお嬢さんが、亡くなる時に「私は今からお浄土に参らせてもらいます。お父さんもお母さんも、私の往くお浄土にぜひ来てください」と、こう言って亡くなられたというのであります。私の往くお浄土に是非来てくださいよと、切に訴えるようにしてお話なされた。

それが、久野さんの胸の中に消すことの出来ないものとなってしまった。

私自身の体が、ああした多発性関節炎という全く残酷というか、あんなひどい状態はちょっと考えられないのですが。それ以前にお嬢さんを亡くし、そしてまたご主人を失い、ご自分の体はというと、もうどうにも自分でままたまならないようなひどい体になられた。

さぞお苦しかったと思います。

ずっと後になって私はお目にかかったんですから判りませんが、そういうことだけでも、あんなひどい状態におかれるなんて、よくあれで生き抜いてこられたなあをつくづく思うんであります。今でも時折私は思い出しては、この位のことでは、久野さんはあんな状態でさえ生き抜いてこられたのに、自分は何ということだろうと、自分を励ます大きな力になって下さったことは事実なんであります。



人にもよくこの話をするんですが、可愛いお嬢さん、たった一人のお嬢さんを失い、大切なご主人を亡くし、そしてご自分は、ああいう常に痛み続けるようなご病気を十何年間も患って床に臥せておられた。

それだけ考えただけでも、よくあそこまで本当に生きられたかと思わざるを得ないのでありますけれども、そういう体でありながら、久野さんご自身が常にいつも心に念じておられたのは、何とかして寛子さんの往かれたお浄土に自分も往かねばならん、何としても往きたいものである、ということであったようであります。

それで、いろんな先生方にも色々ご法を聴聞しておられたようでありますが、ところが何としても胸の中の解決がつかない。

それで私が思いますのに、大体久野さんは浄土宗のお寺の檀家であられたそうであります。ご承知のように、浄土宗という宗派は法然聖人のお開きになった、我々真宗のものとは非常に深いご縁のある宗派であります。

親鸞聖人ご自身は法然聖人を善き人として、こんな有難い先生はいない、この恩師がなければ、私はこのお念仏の教えは聞かれなかつたんだと。いや地獄にでもこの法然上人とご一緒なら落ちてもいいとさえ、それほどに深く帰依しておられた法然上人であります。

しかしながら、こんにちの浄土宗の教えと言うものは、法然上人の真意を受け継いでいかれた親鸞聖人の味わい方と少し違うところがあるように思います。大変な違いがあると言えるかもしれません。

それはどう違うか。同じ念仏の教えであり、同じ浄土宗であるにもかかわらず大変な違いがあるということは。

何処が違うかという、端的に言ってしまうと、現在の浄土宗で説かれていた教えというのは、一生懸命に念仏を唱える、また数多く唱える。そうするとその功德によって浄土に生まれることが出来る。あるいは、一生懸命に善根功德を積んでゆけば、死ぬ時になって阿弥陀様がお迎えに来て下さる。

だから、努めて善いことをしていかなければお浄土に生まれることは出来ないのだと。

そういう意味で心から念仏を唱える、数多く唱える。これが善根となる。それから出来るだけ善い事をし、善い心を持つということが、お浄土に生まれる道であると、こういうふうにおっしゃるようでございます。



なぜそういう考え方が言われるようになったのかというと、それは元をただせば、観無量寿経というお経がございます。真宗においては浄土三部経といい、大無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経があり、所依の經典、即ちよりどころとする經典はこの三つであります。

その中の観無量寿経、このお経はどういうお経かと申しますと、もうすでにご承知でもありましようが、真実の法が大無量寿経に説かれており、その真実のお念仏の道をいただいた人達、お念仏の教えを聞いて救われてお浄土に往った人達を画いたのが観無量寿経であります。

その念仏で救われたのは誰かというと、その主役となられたのは韋提希夫人であります。

この人はまたひどい目に合われた人なんです。わが子によって牢獄に入れられて、大変な苦しみを受けたのであります。そのご主人である王様も息子のために牢獄で殺されてしまう。たった一

人の息子のためにそういうひどい目に遇った人なんです。

それであらゆるものを怨み、憎みしてきたんでありますが、その人が釈尊の教えによってお念仏を喜ぶようになっていかれた。そのことを説かれたのが観無量寿経というお経なのです。

その観無量寿経の中に九品（くぼん）ということが書いてあります。

九品と申しますのは、上品・中品・下品と分かれておりまして、これがまた上品は上生（じょうしよう）・中生・下生の三つに分かれ、中品も上生・中生・下生の三つに分かれ、下品も上生・中生・下生の三つに分かれております。

人間を九つの段階に分けた、人間の種類といえますか、仏教では機根と申しますが、人間の値打ちといえますか、性格といえますか、そういうものを九つに分けてあります。

ですから、この中では上品上生というのが一番上等な人間なんです。下品下生というのが一番くだらん人間なんです。もう手におえないような人間が下品下生、一番上等なのだ上品上生です。

皆さん、ご存知の方がごさいましようが、九品佛という所があります。あれは田園調布線ですが「くほんぶつ」あれはこれから取ってある。ですからあそこには上品と中品と下品の仏さまが三体まつてある。ご縁がありましたら一度お詣りになられるといいと思います。

余談になりましたが、こういうことが観無量寿経に述べられてありまして、悪いことをした人間は下品下生になって、亡くなったらお浄土に生まれても一番下の段にしか生まれられんというわけです。

だから、いい所に生まれたいと思うなら出来るだけ善根功德を積んでいけば、中品にも生まれるだろうし、中品よりもっと一生懸命に善根功德を積めば上品上生として、お浄土の最高のところに生まれることも出来る。

出来るだけ善いことをしなさい、出来るだけ悪いことをやめて、一生懸命にお念仏を唱える、それも純粹のお念仏を唱えていけば、お浄土に生まれても上の方に生まれることが出来る。こういうふうの説かれています。（以下 9 ・ 10 月号に続く）



親鸞聖人坐像

高田派専修寺山内の慈智院に安置された像で、現存する聖人木像のうち最古のもの。「安城御影」を原画として彫塑化したといわれる。高田派専修寺蔵

ご法座等のご案内

7 月

7/10 (日)

午前十時

なかよしクラブ(乳幼児から小学生まで)

7/17 (日)

午前十時

お盆法要・祥月命日合同法要

午後十三時

【岡本信之師】

※午前・午後の2回開催です。

8 月

8/28 (日)

午前十時

定例法座・祥月命日合同法要

【岡本信之師】

8/14 (日)

午前十時

なかよしクラブ(乳幼児から小学生まで)

8/7 (日)

午前十時

定例法座 【岡本信之師】

正午 医療相談 【佐藤公彦医師】

● お盆法要を別途お寺やご自宅また墓前で希望されます方は、早めにご連絡ください。

● 七月の法座は、第三日曜日。 八月の法座は、第一・第四日曜日開催です。 お間違えの無いようご注意ください。

編集後記

- ・ 試行錯誤の作成です。皆様のご助言をお待ち致しております。次号からは、四ページでの編集を予定しています。
- ・ 別添の「ご懇志のお願い」は、時節柄大変とは存じますが、ご高配の程よろしくお願いいたします。
- ・ 平成二十九年三月の「北組団体参拝」は、私にとって初めての団参です。皆様方と揃って行きたいものです。
- ・ 住職継職法要は、十月二十三日(日) 前任職・岡本泰仁師の一周忌法要と合同で厳修の予定です。
- ・ 毎月の定例法座も少しずつ賑やかになってまいりました。うれしいことです。
- ・ 大恩寺(八王子市)の若院・岡本信悟師がハワイでの布教活動を終わり帰国され、早速誓願寺の永代経法要のご講師としてありがたいご法話をいただきました。これからおいで頂くことが増えるでしょう。
- ・ リキとナナは、変わらず元気になっています。リキは散歩の際走るようになりました。

